學術的價値を充分そなへたものと云つてよい。忽必烈汗を英雄化したり、神格化したり溢美の言を振はないだけでも著者の態度は好感が持てる。

但難を云へば文章が稍々概念規定的な用語――これは著者の特徴で論文用語としては非常に成功して居るのであるが――の使用、我々日本人として忘るゝ事の出來ない元寇の問題――之も實際の所眞相はしかく明瞭なものではないが――を五六行で對宋交渉の末尾に付した事等は本書が一般的讀物たる事を目的として居るだけに惜しまれてならない。大都をKambaluc と傳へたのは西方人であるが之が何國語の訛であるかも一應記しておいた方が一般讀者に親切であらう。本書が蒙古人としての忽必烈を正しく認識して居るのは前述の如くであるが同時に支那皇帝としての彼の地位も尙若干考へられてもよいであらう。近世支那の政治の特徴たる所謂君主獨裁權は此の大汗とは如何なる關係を持つものなのか。蒙古大汗であると同時に大元皇帝である彼、その政治的性格はアレキサンダーやアウグスツスと同樣我々の最も興味をもたしめられる所である。此の問に對する明確な解答はこの場合要求する方が無理であらうか。些々たる瑕瑾や、より困難なる事を擧げ望むのは讀む人間の惡癖かも知れぬ。が評者は本書についてかゝる點を指摘するより他批判すべき言葉をもたない。既に淺野忠允氏は「蒙古」五月號に於て筆を極めて本書を推賞して居られる。東亞關係の惡書多き當世、自分も亦自ら感ずる所に從ひ、良書中の良書として大方の一讀を御奬めする次第である。妄言多謝。（支那歷史地理叢書第十　昭和十六年一月　冨山房發行　定價壹圓貳拾錢）

〔佐藤長〕

王安石

佐伯富著

畏友佐伯富學士の「王安石」が支那歷史地理叢書第十一册として上梓された。

王安石と言へば一度東洋史を學んだことのある人達は何か彼について記憶してゐるであらう。それ程有名な人物でありながら實は過去の多くの王安石論は間違つてゐた。間違つてゐたと言ふ言葉に語弊があれば、端的に歪曲されて傳へられてゐたと言へる。彼の新法は全く惡法であつたかの如く取扱はれ、たとへば手許にある大正初期の某氏東洋史精義によれば「神宗在位十八年、勤儉にして耽遊を好まず、宮室を治めず、精を勵して治を圖りたれど王安石に誤られて、一事も意の如くなる能はず、恨を呑みて死し、子哲宗嗣ぐ」と言つた調子で、これでは全く王安石も浮ばれないであらう。實際かう言つた論調の王安石論が、おしなべて世を風靡してゐたのである。全く東洋史學の貧困と言ふべきであるが、その後新しい資料の發見と歷史學の進歩は、在來の王安石論が一方的な史料のみを根據として捏造されたもので、そこに重大な錯誤をふくむことが發見されたが、しかし未だ充分な意味で王安石全體を再檢討するものはなかつた。かうしたうちにあつて本

質的に王安石の新法と、彼が呼吸した宋代の政治と社會とを根本的に掘りさげようとされたのは我京都帝大の宮崎市定助教授で、昭和九年度特殊講義「宋代の黨爭」以下の二三年講義かつゞいた。本編の著者佐伯學士は更に王安石と、宋代全體に亙つて政治と社會の問題を研究し、こゝに王安石論が一册の纒つた書として世におくられることゝなつたのである。

佐伯君はすでに大學二回生のとき、王安石を中心とする宋代經濟問題に就いて論文を作成し、爾來足かけ九年間宋代の社會經濟問題と四つに組んで來た新鋭の學徒で既に「宋代の皇城使」（東方學報京都第九册）以下數篇のすぐれた論稿が發表されてゐる。本編「王安石」は同君の宋代に對する一應の結論であり見通しであるとも見られるから、王安石を再檢討しようとする人は勿論、支那近世史の動きを把握せんとする人々も必讀の文字である。以下簡單に內容を紹介しよう。

著者は先づ一、「獨裁政治の發達」に於いて中世貴族の崩壞から近世士大夫階級――所謂官僚――の勃興する經路を明らかにし、近世の支那天子がそれ以前の天子と異る點、すなはち獨裁權の確立したことを說き、ついでその獨裁政治にも破綻を生じて來た、いきさつを二、「獨裁政治の弊壞」に於て究明し、宋朝の政治にも社會にも行き詰りが生じて來た、それが丁度、北宋四代目の仁宗のときであるとして在來多くの歷史家が、仁宗時代を黃金時代の如く取扱へる誤を指摘し、こうした宋朝社稷の危機を打開するために、英邁なる革新天子神宗によつて王安石――田舍まはりの地方官ばかりやつて、頭はいいが、しかし未知數の――が拔擢される。三、「王安石の出現」がそれである。この章に於て王安石の個人的傳記が紹介されると共に、彼の政治的態度が明らかにされ、王安石の實行しようとした政治改革は周禮の理想であつたが、實際は唐代を目標としたことに注意し、次章に於て愈々均輸法以下の「王安石の新法」を一つ一つ詳細に再檢討してゐるが、とくに彼が最も心血をそゝいだ募役法を懇切に說いて、これこそ過渡期支那社會に適合した妥當の處置であつたと說破する。蹙々たる舊法黨の反對と非難は、一部王安石に對する嫉妬心も手傳つて、一擧に彼の身邊に迫つて來る。しかし彼等の反對は反對のための反對であり、それのみか、結局彼等自身の自己辯護卽ち彼等の利益が、多く新法の斷行によつて破壞される危險に曝らされたゝめ、必死になつて共同防火線を敷かざるをえない。換言すれば彼等の反對は彼等の地位保存を目的とした以外の何物でもなかつたことを曝露して近世支那官僚の性格を明快に描出してゐるが、これは特に現代と關聯して興味深い。五、「新法の意義」に於ては、王安石の改革が何故にもろくも破れ去つたか、その眞因を前章に於てのべた角度よりふりかへりつゝ、「結語」に於ては王安石に對する後世の批判が如何にして決定したかを明らかにした。全編を通じて筆者の堅實溫健なる論旨と、飾らぬ筆法は却つて人をひきつけるに充分である。感情におぼれることなく、流石はと首肯せしめる。かつて梁啓超が王安石傳を著はし、彼を評して「不世出の傑物でありながら天下の謗を蒙り、世のかはるも世評のか

はらざるもの泰西にありてはクロンウエル、東洋にありては荊公王安石なり」と感激的文字を羅列して、大いに王安石を辯明したが、あまりに感情的に、はしり、かうした態度が愼重な歴史家のとらざるところであることは申す迄もない。

同君は數ヶ月間毎夜二三時間づゝ規則的に執筆されたそうでその着實さにはいつもながら驚歎するが、そのために同君もおそれてゐた議論の重複がないこともない。しかしそれも、取るに足らぬ程の小さい事柄で本書の價値は微動だにもしないであらう。

（支那歴史地理叢書　第十一　昭和十六年三月冨山房發行、壹圓貳拾錢、四六版一七八頁）　（荒木敏一）

興京二道河子　舊老城

建國大學研究院刊

本書は滿洲國建國大學研究院歴史報告の第一として刊行されたもので、滿洲に於ける清朝初期の歴史地理の實地調査報告である。その内容は本調査を行ふに當りその手引の文献となつた申忠一書啓の研究編と實地踏査の報告の部に分れて居る。今その調査の動機目的と略述してみると、清の太祖が兵を起して新に國を興すに至つて自己の根城を築いた。やがて彼の勢力が増大し國が發展するにつれてその城の性質が變つて來、始めは單に軍事的意味合の要害の城であつたのが國力の發展人口の膨脹に伴つて漸時政治都市としての樣相を帶びて來る。そして頻々たる遷都の事が餘儀なくされた。彼が後金國最後の首都となつた瀋陽城（奉天）に住む迄四度居を移した。その最初のものは清朝入關後の記錄によつて撫順の東に當る興京老城といひならはされて居たが、實際はその前にもう一つ根城があつたので、それが本報告に出てくる興京の近くの二道河子の山城であつた、といふのである。この二道河子の山城に關する之迄の記錄はその記述甚だ簡單で、果して居城であつたのか、又その地が現在の何處に當るか不明のまゝに專門史家に課せられた問題として今日に至つたのである。所がはからずも近年この山城に關する詳細なる根本史料が出て始めてその全貌が明になつた。その史料といふのが本報告所載の申忠一書啓である。この記錄は、清の太祖がこの二道河子の城に據つて居る時分曆の上では明の萬曆二十四年朝鮮から敵情視察の爲に派遣された申忠一がその道程、太祖の居城の構造、太祖の幕庭の情況、滿洲軍の動勢、滿洲人の生活等自己の見聞を記述し且圖示したものである。萬曆の末年に出た李民煥の建州聞見錄、柵中目錄と共にこの種のものの白眉をなすものである。この書が發見されるや、故稻葉博士の手によつて弘く學界に喧傳されるに至つた。本報告ではこの手記に基いて問題の二道河子城を確める事且その遺跡と覺しきものを得た後、その實地踏査の結果が申忠一の報告と果して合致するや否やを調査するのが目的であつた。即ち文献の指示に從つて遺蹟を調査しその結果によつて又文献の確さを檢討しようといふのである。從來清初入關前の史實を明にする爲には朝鮮側の史料は不可缺とされて居る。そしてヌルハチ出生以前の史實